

3 遺 構

(1) 調査前の地形および基盤層と整地

調査前の地形 調査地には、カシやマツなど多数の樹木が見られたが、調査にともない伐採した。また、地表面には西室大房の礎石の一部が露出していた。この付近の地形は、礎石露出部分ではおおむね平坦で、そこから北西方向に向かってやや標高を下げる。設定した調査区（Ⅰ・Ⅱ区）の東端は、興福寺境内の参道に面し、西室大房の東側柱筋想定位置は参道の路面にあたる。

基盤層と整地 調査区の基本層序は、上から表土、暗褐色ないし褐色砂質土（土師器片を多く含む）、そして、基盤層の明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土である。基盤層にはチャート等の円礫ないし亜円礫を多く含む。基盤層の標高は、Ⅰ・Ⅱ区ともに東方に露出する西室大房の礎石付近では95.2～95.3mと平坦で、西室大房の西側柱筋の西2～3mに展開する数条の南北溝（土管暗渠）群を境に、西方に向かって緩やかに標高を下げ、調査区西方の標高は約94.7mとなる。北円堂院東面回廊付近の基盤層の標高は約94.7mであり（2011年度調査所見）、今回のⅠ・Ⅱ区西端から西は一度平坦になることがわかる。そして北円堂院北面回廊の東部付近（Y=-15.574）を境に標高約93.2mまで大きく落ち込む。南面回廊の南門想定位置以西でも同様の落ち込みが認められ、さらに北円堂の西方でおこなった2014年度の防災設備工事では、標高93.5mでも基盤層は確認できていない。したがって、この基盤層は、北円堂院の中央付近を境に西方に向かって急激に落ち込んでいたと考えられる（第3図）。

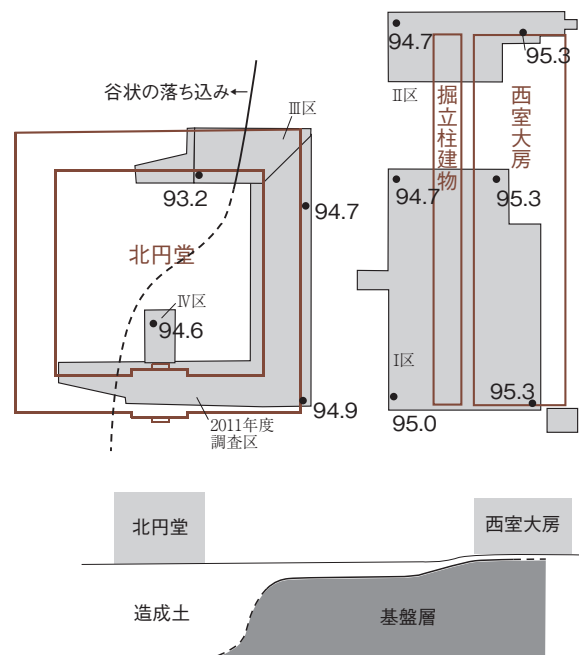
西室から北円堂院の中央付近までの遺構検出面は、基本的に基盤層上面である。ただし、西室大房の西方では、基盤層の上に暗褐色ないし褐色砂質土が認められ、この上面で複数の遺構を検出した。これらの遺構の埋土には中世の土師器片を含むことから、それ以後の整地と考えられる。また、基盤層が大きく落ち込む北円堂院の西方では、基盤層の上に、造成土である暗褐色粘土を複数層重ねたのちに、黄褐色粘質土と砂質土を互層とした版築土を積む。

(2) 西室とその周辺の遺構

i. 西室に関わる遺構

西室大房SB10450 桁行10間、梁行4間の南北棟礎石建物で、北端の桁行1間半分と、南方の桁行7間分を検出した（第6図）。建物規模は、南北約62.5m（212尺）、東西約12.4m（42尺）で、柱間寸法は、桁行が南端2間分のみ約4.8m（16尺）、そのほかは約6.6m（22.5尺）、梁行は中央2間が約3.2m（11尺）、両脇間は約3.0m（10尺）である（基準尺はこれまでの調査成果に倣い1尺=0.295mとする）。桁行方向の親柱礎石間には間柱礎石を2基ずつ配し、それぞれの柱間は約2.2m（7.5尺）である。

親柱礎石は三笠山産安山岩や花崗岩の自然石である。安山岩の礎石は、長軸90～115cm、短



第3図 基盤層の標高と断面模式図

軸70～85cm、成60～70cm程度で、柱座などの造り出しはない。上面が赤変しているものもあり、被熱痕跡と考えられる。礎石据付穴は径1.3～1.5m程度の隅丸方形ないし楕円形で、深さは検出面から30cm程度である（第4図）。東入側柱筋（口列）の礎石は、現参道の造成により後世に若干西方へ動かされているが、そのほかの残存している安山岩の礎石には据え替えの痕跡はなく、遺物の出土もないことから、創建当初の位置を保っていると考えられる。花崗岩の1石（ハ十一）は、礎石の下方に古い礎石の抜取穴と据付穴が認められる。後世の据え替えと考えられるが、抜取穴、据付穴の埋土から遺物は出土せず、据え替えの時期は不明である。この礎石の大きさは、長軸80cm、短軸65cm、成20cmで安山岩の礎石よりも薄く、やや小さい。礎石が失われている箇所では、据付穴、抜取穴を検出した。「ハ一」、「ホ二」の礎石抜取穴には多量の瓦や拳大の礫などを含み（第5図）、「イ十一」の抜取穴には凝灰岩の切石が捨てこまれていた。また、「二七」礎石は、抜き取られてはいないものの、礎石下に瓦が差し込まれており、礎石を浮かせて抜き取ろうとした痕跡の可能性もある。

間柱の礎石は一部が残存していたが、失われているものも多く、抜取穴や据付穴のみを検出したものもある。これは礎石が小型であることや据付穴が浅いことに起因している。残存礎石の大きさは径50～60cm程度、成25cm。礎石据付穴は径70cm、深さは検出面から10cm程度。間柱の据付穴からも遺物の出土はない。断割調査をおこなった「二五」北側の礎石、「ホ十」北側の礎石は、創建時の位置を保っている。「二七」北側の礎石は石を2段に積んでおり、高さ調整の痕跡と考えられる。

基壇 西室大房SB10450の基壇は、砂礫を含む明黄褐色粘土からなる地山削り出しで造られている。基壇南方では上面にわずかに積み土が認められる。基壇外装は、北面と東南隅でのみ確認し、東南隅では雨落溝も検出した。いっぽう、基壇西面と東面の北端部では、基壇外装や雨落溝などの痕跡は、後世の遺構による削平などにより確認できなかった。大房北妻と南妻の礎石心から地覆石外面までの距離は約1.9m（6.5尺）である。東面の基壇の出は、東南隅の羽目石と「イ一」礎石抜取穴の位置から、南北両面と同様に約1.9mと推定される。基壇北面および南面の地覆石の外面間距離は約66.5m（225尺）で、南北の基壇規模が確定した。東西の規模は現状では明らかにしえない。礎石上面の標高は約95.5m、基壇外装地覆石上端の標高が約95.0mであり、基壇上面と礎石上面との比高を約10cmと仮定すると、基壇高は約40cmに復元できる。

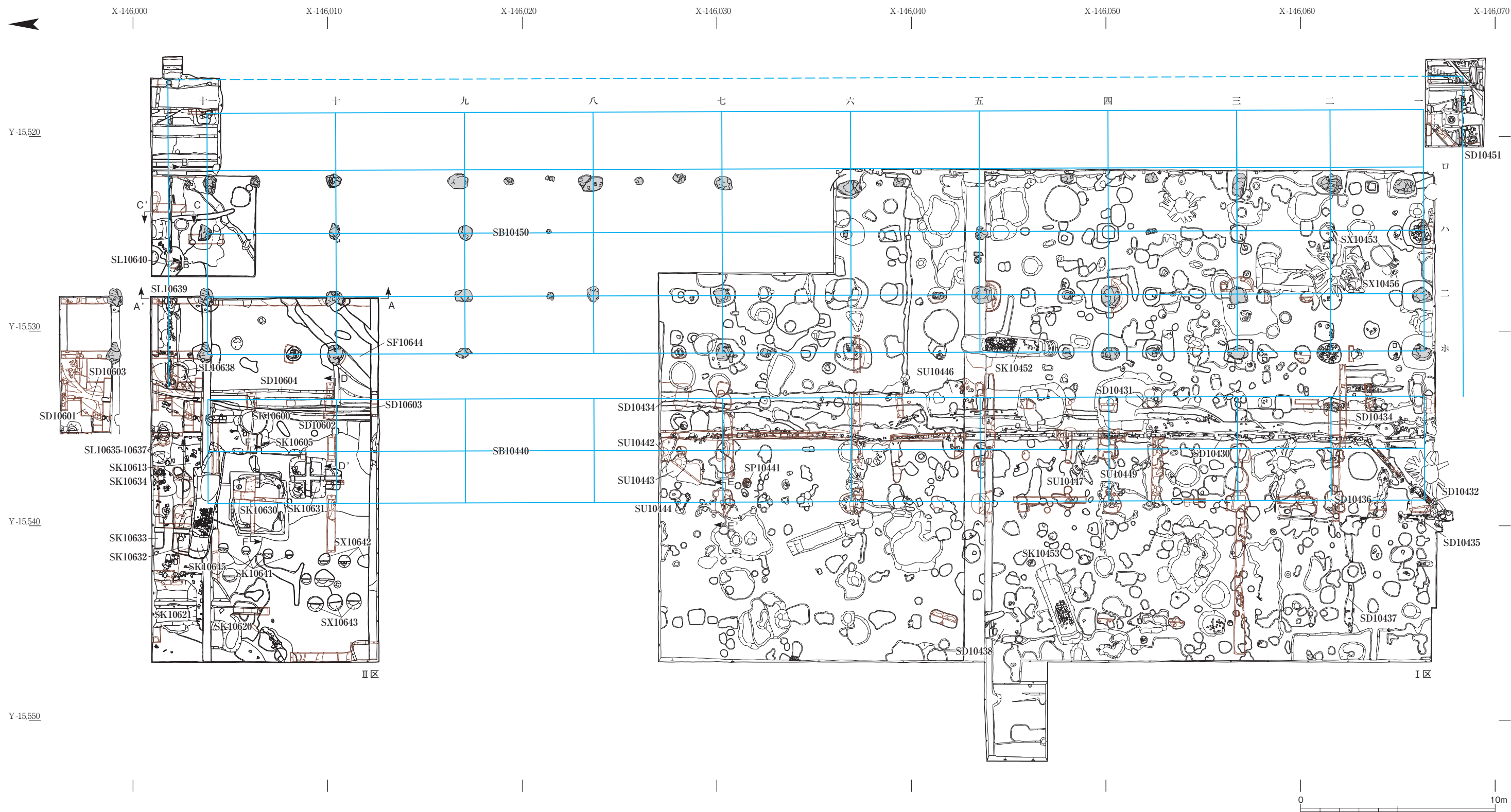
基壇外装は、北面・東南隅とも地覆石と羽目石を確認した。石材は、すべて二上山産凝灰岩である。基壇北面では、地覆石6石、羽目石5石を確認した。地覆石は幅20～25cm、高さ約15cm、長さは完存するもので93cm。羽目石は幅15～17cmで、高さは20cm、長さは完存するもので94～96cm。北面で



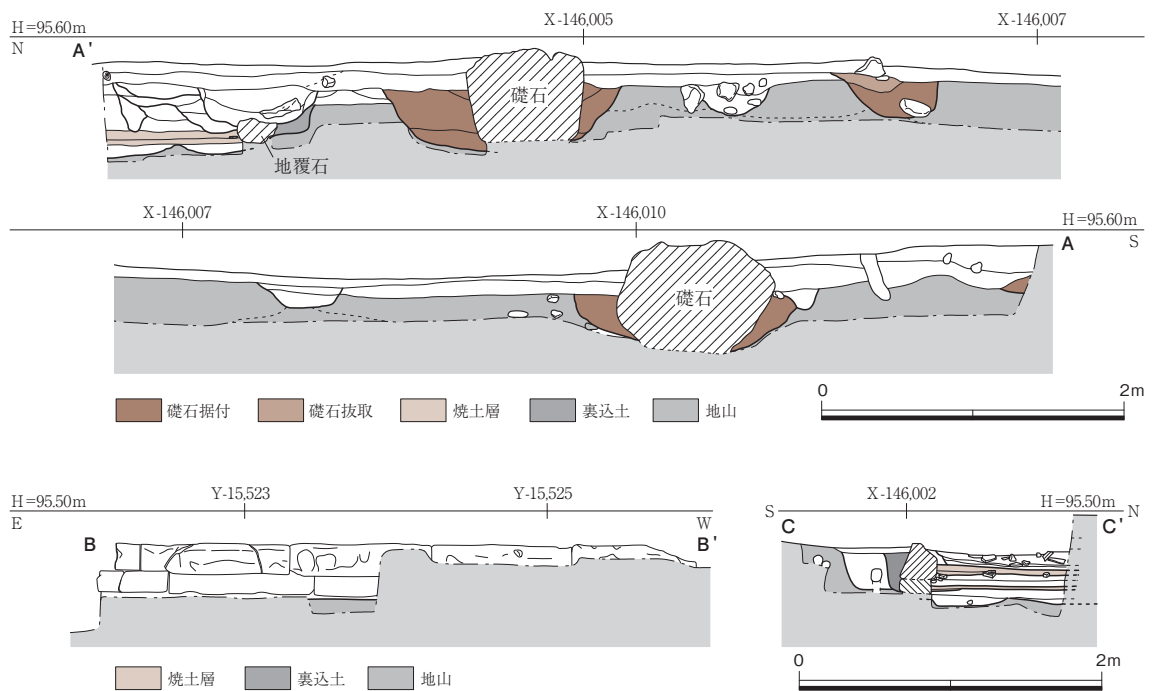
第4図 二五礎石据付穴断ち割り（南から）



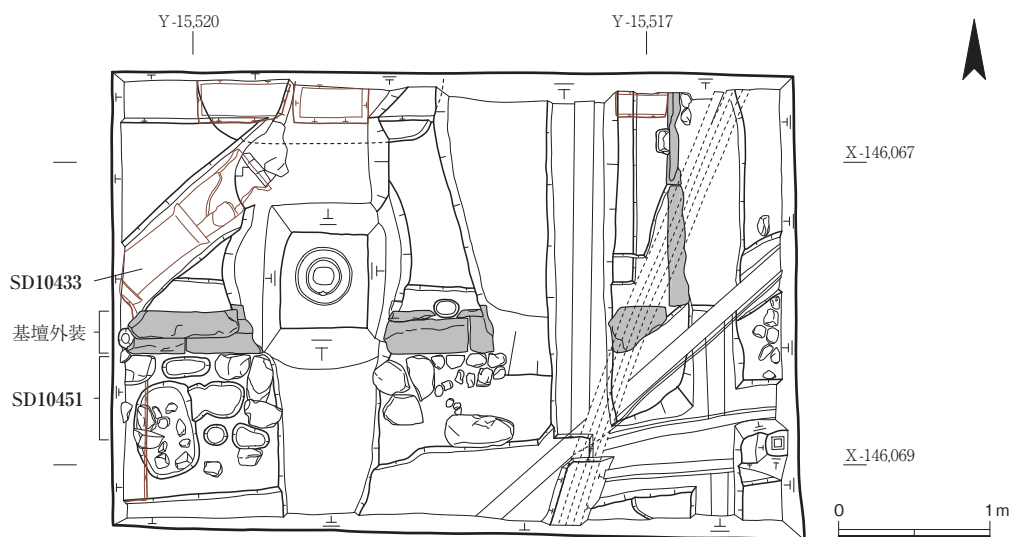
第5図 ハ一礎石抜取穴（南西から）



第6図 西室調査区（Ⅰ・Ⅱ区）遺構平面図 1：200（左端はⅡ区北端の下層遺構を示す）



第7図 基壇北端土層図 (A-A'・C-C') および北面基壇外装立面図 (B-B') 1:50



第8図 基壇東南隅 (東拡張区) 平面図 1:50



第9図 北面の基壇外装 (北東から)



第10図 東南隅の基壇外装 (南西から)

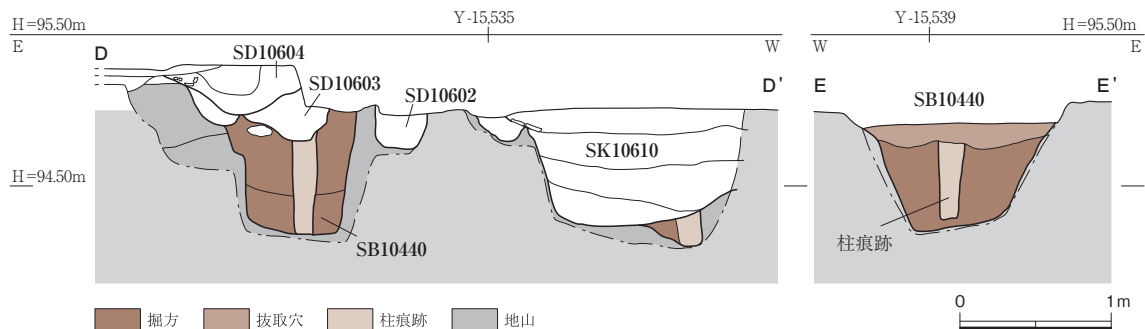
両者が見られたのは礎石ハ列より東方で、羽目石が地覆石よりも基壇の外に傾く（第7・9図）。いっぽう、礎石ハ列より西方では、地覆石のみが残存し、地覆石上面には羽目石をのせる仕口部分を残す。地覆石は、少なくともハ列より西では瓦片を含む整地土上面に据えられており、正確な時期は不明だが後世に据え替えた可能性が高い。ただし、地覆石の据え付け痕跡は1つのみであり（第7図）、その位置は当初の位置を踏襲していたと考えられる。基壇東南隅では、地覆石および羽目石の一部が残存していた（第8・10図）。南面は比較的残りが良いが、東面は後世の削平を受けて地覆石・羽目石とも外側を大きく削られていた。地覆石は計6石が残り、幅30～34cm、高さ10～15cm、長さは残存長で80cm。上面には、羽目石をのせる仕口をもち、露出部分は石組溝と同じ高さまで削られている。羽目石はすべて後世の遺構により破損するが、幅17cm、高さ15cm、長さ69cmが残る。また、地覆石・羽目石の内側にこれらの据付掘方を検出した。据付掘方は幅52cm、深さは検出面から22cmである。

石組溝SD10451 基壇東南隅では地覆石に接して石組溝を検出した（第8・10図）。西室大房SB10450の雨落溝と考えられる。南面には溝外側の側石が1石のみ残存しており、地覆石から側石までの幅は、内法で40cm、深さ10cm。約20cmの扁平な安山岩礫を2列並べ底石とするが、一部抜き取られている。部分的に径10～15cmの礫を敷き詰めた部分がある。

掘立柱建物SB10440 大房SB10450の西側柱筋の約2.5m西方付近には数条の南北溝群があり、この溝埋土を除去して南北棟掘立柱建物の東側柱筋の柱穴を検出した（第6図）。桁行10間、梁行2間で、大房と梁行方向の柱筋を揃える。建物規模は、桁行が大房と同じ約62.5m（212尺）、梁行は約5.2m（17尺）に復元できる。柱間寸法は、桁行は大房と同じく南端2間が約4.8m（16尺）、以北が約6.6m（22.5尺）であり、梁行はやや短く約2.6m（8.5尺）等間である。また、桁行方向の親柱間を三等分する位置（大房の間柱と柱筋を揃える）に小型の柱掘方を検出した。これらは、間柱または床束の痕跡と考えられる。親柱の柱穴は、Ⅰ区では樹根で確認が困難な棟通り南端の1基を除いてすべて確認し、Ⅱ区では東側柱2基と棟通りの柱穴の2基（底面のみ）を確認した（第12図左）。その他の柱穴は後世の土坑群により削平を受け、確認できなかった。親柱の柱穴掘方は一辺0.8～1.2mで、深さは検出面から約0.8～1.0mである。親柱の柱穴には柱痕跡が残り、柱径は約20cmである（第11図）。いずれの掘方から



第11図 SB10440柱穴の断面（E-E'：南から）



第12図 SB10440柱穴断割土層図（左：D-D'、右：E-E'） 1：50

も遺物は出土していない。一部の柱穴では、掘方の上位に抜取穴と考えられる厚さ20cm程度の埋土がみられた（第12図右）。これは掘立柱建物廃絶後に、新たに据え付けられた礎石の抜取穴である可能性も否定できない。間柱の柱穴掘方は大きさ、平面形状、深さともに不揃いだが、およそ1辺50～80cmで、深さは検出面から約40cmである。この建物の東側柱筋と、大房SB10450の西側柱筋との間の距離は、心心で約2.5mである。掘方埋土に遺物を含まないため創建時期は不明だが、掘方埋土が基盤層由来の礫混じり黄褐色砂質土であるなど、SB10450の礎石据付穴の埋土と類似しており、創建は古代まで遡る可能性が高い。廃絶は、柱穴を壊す土坑SK10605が土器の年代観から、平安時代中頃が下限となる。この建物は、西室大房と南北規模が同規模で柱筋を揃えるため、小子房の可能性はあるが、大房との距離が約2.5mと近接しており、確定できない。この問題について第5章で改めて検討する。

このSB10440の基壇の積み土や地覆石等の基壇外装、雨落溝は、その痕跡を含めて確認できなかった。この建物周辺には後述する南北溝群や後世の土坑群があり、これらに削平されている可能性もある。

ii. 土管暗渠・素掘溝群

土管暗渠SD10435～10438 SD10435～10437はI区西南部で検出した土管暗渠。SD10435は南北方向の暗渠で長さ約8m、SD10436・10437は東西方向の暗渠でそれぞれ長さ約4mと約6m分を検出した。SD10436は西端が、SD10437は東端がSD10435と接続する。削平により大半の土管が失われているが、幅40cm程度、深さ20cm程度の素掘溝に瓦質土管を据え、その上に平瓦をのせる。SD10435は凝灰岩を用いて補強されている。SD10435・10436は、後述のSD10432に壊されている。SD10438はI区西端で検出した東西方向の土管暗渠。長さ0.8m分が残存する。SD10435・10436・10438には行基式の丸瓦円筒土管が使用されており、一連の暗渠になる可能性がある。

土管暗渠SD10430 I区中央を南北に縦断する土管暗渠（第13図）。長さ40m以上でI区調査区外の南北に延びる。I区南部では斜行する土管暗渠SD10432と接続する。幅40cm程度、深さ25cm程度の素掘溝に瓦質土管を設置し、その上に平瓦または丸瓦をのせて暗渠とする。土管の繋ぎ口の方向が異なる箇所があること、土管の繋ぎ口の形状が2種類あること、土管の傾斜の方向が場所により異なることなどから、これらは後世の改修部分と考えられる。この土管の下層から平瓦・丸瓦を並べた深さ20cmの溝が検出されたところもある。土管は、14～16世紀の玉縁式、ソケット式土管である。

土管暗渠SD10431 SD10430の約1m東側で検出した南北方向の土管暗渠。SD10430同様、素掘溝に瓦質土管を設置する。幅40cm、深さ20cm、長さ17m。南北両端はゆるやかに西へ曲がり、SD10430に接続する。

土管暗渠SD10432 I区南端で検出した北東－南西方向の暗渠。長さ約5.8m分を検出した。北端はSD10430と接続し、南端で東西方向に折れる。幅40cm、深さ25cmの素掘溝に瓦質土管を設置し、上に平瓦または丸瓦をのせる。SD10430との接続部分ではSD10430の土管の一部を壊して取り付け



第13図 土管暗渠SD10430・10432 検出状況（北から）

ている（第13図）。南端はSD10435 を補強する凝灰岩ごと壊して設置されている。掘立柱建物SB10440の西南隅の柱穴を壊す。

南北溝SD10434 I 区中央を南北に縦断する素掘溝。幅70 cm、深さ30 cm程度で、長さ40m 以上。I 区の南側では土管暗渠SD10430のすぐ東に位置し、その据付掘方を壊す。I 区中央付近で東に約2.4m クランクし、北へ延びる。

I 区の土管暗渠群および素掘溝は、重複関係からSD10435～10438が最も古い。これらは土管の型式から平安時代以前に位置付けられる。後出するSD10430～10432は掘立柱建物SB10440の廃絶後、土管の型式から14世紀中頃に埋設され、16世紀にも改修されたと考えられる。SD10434はこれらよりも新しく、近世に位置付けらる。

南北溝SD10601～10604 II 区西室大房において、大房SB10450の西方2～3 mで南北溝を4条検出した。SD10601は瓦暗渠で、II 区北端付近で東に斜行する。約3 m分を検出した。それ以外は素掘溝である。幅約40～50 cm、深さ20～40 cmで、いずれも南流する。このうちSD10601が最も古く、次いでSD10602、SD10603と続き、SD10604が最も新しい。その年代は限定しにくいだが、SD10601は、掘立柱建物SB10440より新しく、後述の円形土坑SK10600よりも古いことから、平安時代中頃～鎌倉時代に位置付けられる。またSD10602～10604は、SK10600よりも新しく後述の鑕群よりも古いことから、室町時代～江戸時代前半の間のいずれかの時期に収まると考えられる。これらの南北溝は、いずれも西室大房の西北隅付近で基壇に沿って折れないため、地覆石の抜取穴や据付穴とは考えにくい。SB10440廃絶後にSB10450の雨落溝や排水溝等として機能していた可能性がある。

iii. 廃棄土坑群および土器溜

小土坑SP10441 I 区西北部で検出した小土坑。径50 cm、深さ約35 cm。内部からは丸瓦、径約15 cmの礫とともに、平安時代初頭の須恵器杯、鉢、双耳壺が出土した。

土器溜SU10442～10444 I 区の北端で検出した3基の浅い土坑。いずれも大きさは長径1.4m程度、深さ20cm程度。埋土から多量の土師器が出土しており、まとめて廃棄したものと思われる（第14図）。出土した土器の年代は、SU 10442・10443 が13 世紀中頃、SU10444 が室町時代に属する。

土器溜SU10446・10447 I 区中央付近で検出した不整形な浅い土坑。SU10446は南北2.2m、東西1.6 m。埋土から完形を含む土器が出土した。先述のSD10434より古く、SB10440の間柱柱穴より新しい。出土土器の年代は13世紀前半とみられる。SU10447は、東西1.2m、深さ10～20 cm。この土坑の底面で



第14図 土器溜SU10442・10443・10444（南東から）



第15図 円形土坑SK10600 内の土器廃棄状況（北から）

SB10440 の柱穴を検出した。埋土には13世紀から室町時代の土器を含む。

円形土坑SK10600 II区中央で検出した、径約1.2m、深さ約2.5mのほぼ正円形の土坑。埋土は大きく複数の単位に分けられ、検出面より50cm下から底面までの約2mの間に、数枚の砂層を挟んで、14世紀前半に位置付けられる赤土器を多量に含む（第15図）。土坑の底面には平瓦を数枚敷く。井戸の可能性もあるが湧水はなく、廃棄土坑として利用されたと考えられる。

土坑群SK10605～10625 II区の南北溝群SD10601～10604よりも西方には、土器や瓦を多量に含む廃棄土坑群が展開する。大きいもので径10m以上、深さ1.5m以上、小さいもので径40cm前後と多様である。II区中央では土器の廃棄土坑が多く、西方では瓦の廃棄土坑が多い。また、SK10610とSK10622は調査区西南部の一帯に広がる土坑あるいは整地で、深さは両者とも1.5m以上ある（第6・12図）。土坑は複雑に重複し、平安時代から江戸時代にかけて掘削が断続的に繰り返されていたようである。II区西部のSK10619やSK10620では、奈良時代から平安時代の瓦や土器が出土した。また、II区中央部の廃棄土坑SK10605は、出土土器から平安時代中頃に位置づけられる。これらが最も古い土坑群である。後者は掘立柱建物SB10440の柱穴を壊しており、これより新しい。その他の土坑で年代が分かるものには、SK10613（17世紀前半）があり、この土坑からは、「びしゃもん」「文珠」「地藏」などの墨書を有する土器が出土した（23頁で後述）。

iv. 冶金関連遺構

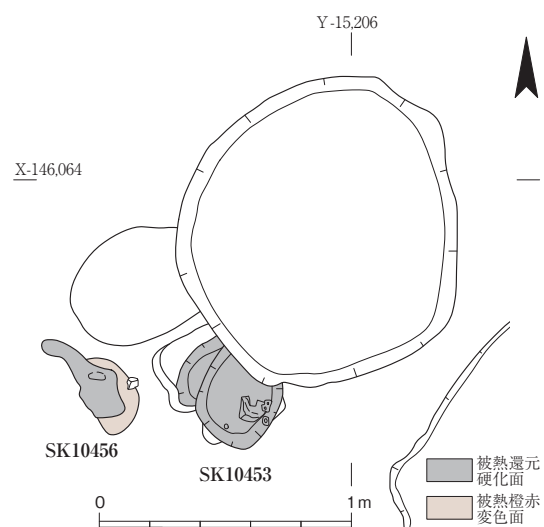
SK10453 I区東南隅付近の西室大房基壇上で検出した（第16図）。2基が上下に重複しており、いずれも後世の礎石抜取穴により、北半が破壊されている。平面形は楕円形ないし不整な隅丸長方形を呈し、上部土坑は検出状態で、東西径約30cm、南北径約25cm、深さ15cm。下部土坑は大きく破壊を受けているが、上部と同規模とみられる。いずれも底部から側壁にかけて、被熱還元硬化面が認められた。埋土から鋳型片、銅滓などの鋳銅関係遺物と、褐色鉄滓片、鍛造剥片、粒状滓などの鉄鍛冶関連遺物が出土した。鉄滓は被熱硬化粘土に密着した状態で出土しており、鉄鍛冶炉の可能性が高い。下部土坑からも同様の遺物が出土しており、同様の機能を有していたと考えられる（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」『奈文研紀要2015』、2015）。SK10453の土坑埋土からは中世の土器が出土したが、明確に近世以降の土器等は認められなかった。

SK10456 SK10453の西方約10cmの位置で、長径約40cmの不整楕円形を呈する被熱灰褐色還元硬化粘土面と、その東側外縁に同心円状に広がる幅約20cmの被熱橙赤変色面を検出した（第16図）。甗炉の可能性もあるが詳細は不明である。

I区南部では中世のある時期に鉄鍛冶や鋳銅など金属生産がおこなわれており、造寺あるいは改修に関わって設置された工房が存在していた可能性が高い。（小池伸彦「興福寺西室出土冶金関連遺構・遺物の再検討」〔前掲〕）。

v. II区近世遺構群

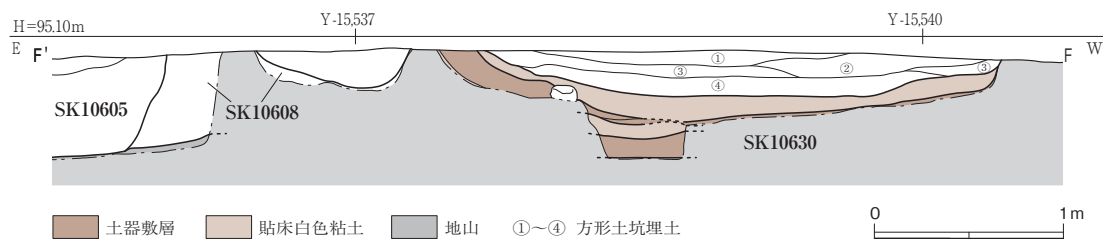
方形土坑SK10630～10633 II区で方形土坑を4基検出した。SK10633はII区北端にあり、さら



第16図 鉄鍛冶遺構SK10453・10456 平面図 1:30

に北に続く。その南のSK10632は後述の長方形土坑SK10645に壊されているため、部分的な検出にとどまる。両土坑とも一辺1.8m前後の方形で、深さ約30cm。

SK10630は、一辺2.6m前後のほぼ正方形で、深さは約40cm。形態は竪穴建物状で、白色粘土の貼床をもつ。平面と床面の重複から少なくとも2度の改修がある。詳細に調査した最も新しいものでは、貼床とその下の多量の土師器を重ねて埋めた土器敷きを確認し、貼床面を掘り込む小穴を4基確認した（第18・19図）。小穴はいずれも径15cm前後、深さ10cmほどで柱穴かどうか判然としない。貼床と土器敷きは2時期分が重なる（第17図）。上層の貼床は厚さ10cm前後、土器敷きは厚さ5cm前後で、下



第17図 方形土坑SK10630 土層図 1：40



第18図 方形土坑SK10630 検出状況（西から）



第19図 方形土坑SK10630 貼床下土器敷検出状況



第20図 II区北端近世遺構群検出状況（北から）

層の貼床は厚さ15cm、土器敷きは厚さ10～15cm前後である。土器敷きに含まれる土器の年代は、いずれも17世紀後半から18世紀前半までである。この年代観によると、SK10630の構築は、西室大房焼失の年代（1717年）より遡る可能性があり、大房と併存していた可能性がある。

SK10631は長軸約2.1m、短軸約1.9mで深さ約0.9m。これらの方形土坑からは、土器が比較的多く出土するのみであり、出土遺物から機能は推定しがたい。ただし、一辺1.8～2.6mという規模や、明らかに床面を意識したSK10630の貼床の構築状況から、貯蔵施設等の機能をもつ施設と考えられるが、形態が少しずつ異なっておりそれぞれ別個の性格を有していた可能性もある。

土師器廃棄土坑SK10634 II区北端で検出した径約1.5m、深さ30cm程度の円形土坑。完形の土師器が多量に出土した（第20図）。廃棄土坑と考えられる。土師器は18世紀中頃のものと考えられる。

竈SL10635～10640 II区北端付近に6基確認した。これらは西室大房SB10450の基壇外装を壊して造られており、大房廃絶後の遺構である。平面形状が長軸70～90cm、短軸50～70cmの小楕円形で、一端が開く。この開いた部分が焚口と考えられる。底面には木炭片が広がり、側壁は被熱により赤化する。ただし側壁の立ち上がりは、後世にほとんど削平されている。形態的には大きく次の2つに分かれる。すなわち、竈SL10635・10636の2つは、2基が一連となり、平面形状がメガネ状になる。もう1つは、SL10638～10640のように1基単独のものである。両者は焚口と煙り出しの方向が異なり、前者ではその方向が西→東のものと南→北のものがあるのに対して、後者では西→東のみである。前者の2連の竈では双方が重複しており、その前後関係は南北方向から東西方向となる。

埋甕土坑群SX10641～10643 II区西南部で計11基の土坑を検出し（1基はII区南壁にかかる）、3基から4基を1単位として南北に並ぶ。土坑の大きさは、径50～80cm、深さ30～50cmで、うち2基から陶質の甕が出土し1点はほぼ完形であった。これらは、水甕群あるいは便所の可能性がある。

近世道路SF10644 II区の東端部に北東―南西方向の斜行溝2条と、これに挟まれる小礫敷面を検出した。これは「奈良町絵図」（19世紀前半）などの資料から北円堂への参道と考えられ、2011年度におこなった北円堂院の調査で確認したSF9975に接続する可能性がある。

v. 近代以降の遺構

長方形土坑SK10452・10453・10645 調査区の各所に認められる深さ1m以上の長方形土坑。SK10452と10453はI区で検出された。長軸約4.5～5m、短軸約1.2m、深さ約1.2m。SK10452は南北方向を（第21図）、SK10453は北東―南西方向を向く。SK10645はII区の中央やや北寄りで検出した。長軸約5.5m、短軸約1.1m、深さ約1.2mで、長軸が北西―南東方向を向く。

これらの土坑の短軸は、緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形する。また、底面に瓦片を敷くことで共通する。出土遺物にガラス瓶など近現代の遺物を含む。太平洋戦争時の防空壕と考えられる。



（芝・番 光） 第21図 長方形土坑SK10452検出状況（北から）

(3) 北円堂院の遺構

i. 北円堂院に関わる遺構

北面回廊SC9955 存在を想定していた8基の礎石抜取穴のうち、検出したものは南側柱の2基(SP10660・SP10661)である(第23図)。南側柱の残り2基は、巨大なカシ樹根下あるいはその近傍にあり、検出できなかった。また、北側柱の全ての礎石は、後述する近世以降の土坑群に壊され、確認できなかった。調査前に樹根付近に見えていた安山岩巨礫は、ほぼ礎石想定位置にはあるものの、後世に動かされた痕跡が認められた(第26図)。検出した抜取穴の平面形は、ほぼ円形で径60×80cm程度、深さは検出面から約20cm。抜取穴からは瓦片が少量出土した。2基の柱間寸法は、『概報Ⅵ』の想定どおり9.6尺と推定できる。

基壇 基壇の築成方法は、Ⅲ区の東西で異なる。東半では、基本的に基盤層の礫混じり明黄褐色土を削り出して造る。一方、西半ではこの基盤層が西方に向かって急激に標高を下げる。この基盤層上に、褐色土や暗褐色土などを比較的厚く積む(約1.1m)。その後、少なくとも地覆石よりも約1m外側まで版築を施し、地覆石を据えたのち基壇の高まり部分に版築をおこなう(第22・24図)。基壇部分の版築は、黄褐色粘土と黄褐色砂質土を5cmほどの厚さで互層に積む。後述する近世以降の土坑群によって基壇北半は完全に壊されている。

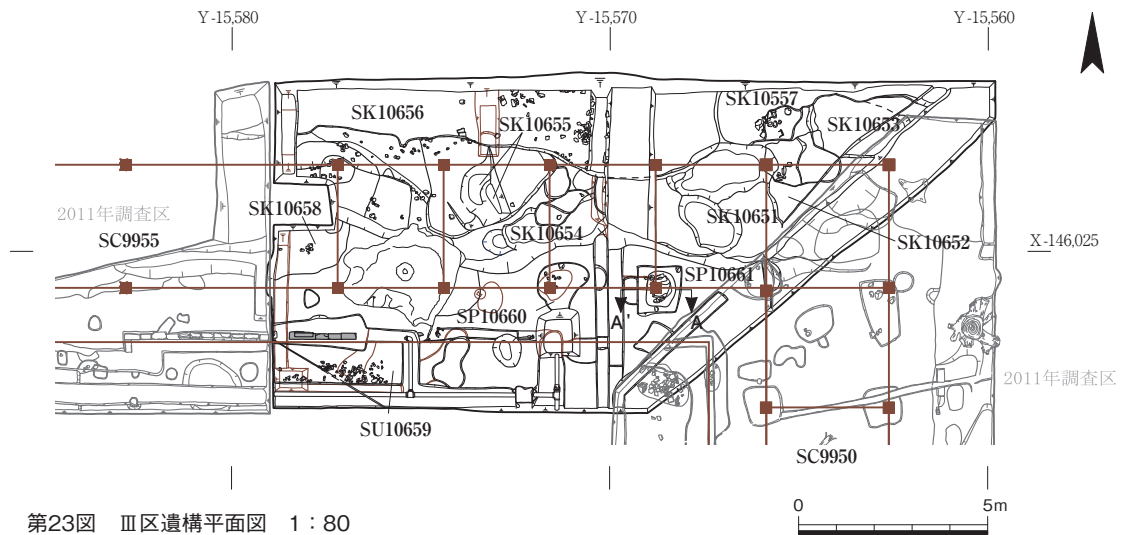
基壇外装は北面回廊基壇南面の一部で、地覆石と羽目石を確認した(第25・27図)。これは1975・76年の境内防災設備工事にとまなう発掘調査で確認していたもので、今回は再検出となる。地覆石は5石、羽目石は1石が残り、地覆石はそれぞれ幅30～50cm、奥行15～20cm、成12～15cm、羽目石は幅48cm、奥行12cm、成18cmである。いずれも地獄谷産凝灰岩の切石を用いる。これらの切石が残っていない部分では、抜取溝を確認した。しかし、地覆石の破片らしき凝灰岩片が残存する箇所では、据付痕跡を確認できなかった。これは、基壇造成の過程で据付溝などを掘らずに地覆石を据えたためと考えられる。

瓦溜SU10659 Ⅲ区西南部、基壇外装より南側で検出した。基壇土の上層を切り込み、径3mの範囲に瓦片がまばらに広がる。中世の土師器や瓦器を含む。

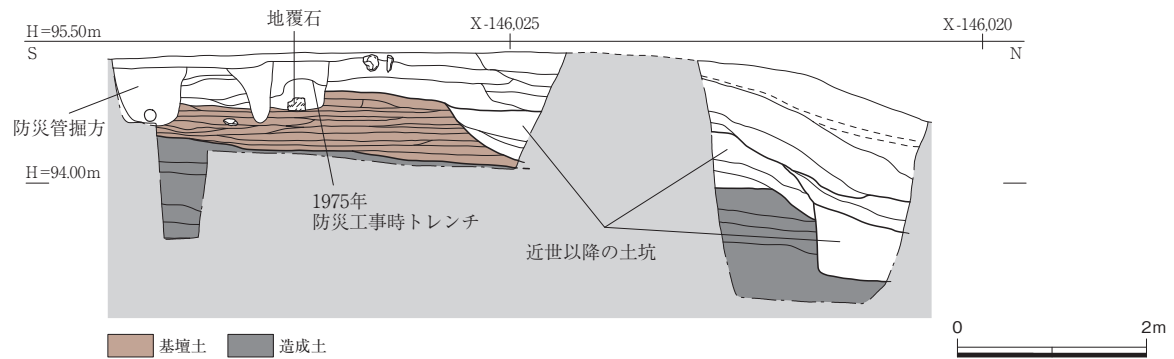
燈籠基礎据付穴SP10671～10673 Ⅳ区において北円堂南面に3基検出した(第29図)。SP10671は南面階段の中軸ライン上にほぼのり、階段最下段の踏石南端から約3.2m、北円堂基壇地覆石外面から約4.6mの位置で検出した。またその他の2基は、SP10671と東西軸を揃え、SP10671から西に約2.5mの位置でSP10672を、東に約2.1mの位置でSP10673を検出した。位置と大きさから、いずれも燈籠の据付穴と考えられる。SP10671は径60cm×90cm、深さ25cm(第30図)、SP10672は径60cm、深さ20cmである(第31図)。SP10673は、正確な大きさは分からないが、SP10672とほぼ同規模と考えられる。3つの据付穴には径5～10cm前後の円礫(花崗岩、チャート、流紋岩)が充



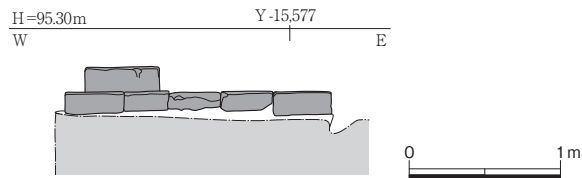
第22図 Ⅲ区西壁南端断割土層断面(東から)



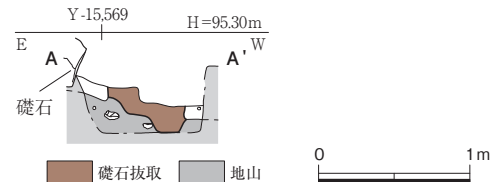
第23図 Ⅲ区遺構平面図 1:80



第24図 Ⅲ区西壁土層図 1:80



第25図 Ⅲ区基壇外装立面図 1:50



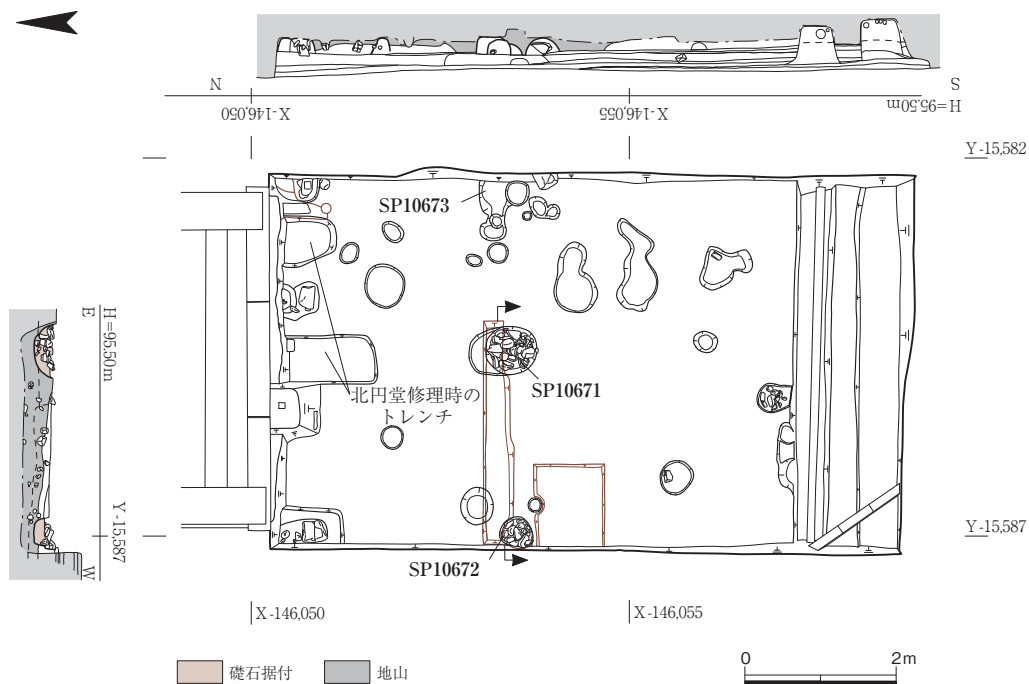
第26図 Ⅲ区礎石断割土層図 1:50



第27図 Ⅲ区基壇外装検出状況 (南東から)



第28図 Ⅲ区近世・近代土坑検出状況 (北東から)



第29図 IV区遺構平面図 1 : 100



第30図 SP10671検出状況 (北西から)



第31図 SP10672検出状況 (東から)

填されており、SP10671からは奈良時代後半の須恵器坏が出土した。基礎据付穴3基は大きさに違いが認められるものの、埋土や検出面に共通している。現状では同時併存かどうか検証できない。

その他、調査区北辺には、北円堂正面の仮設屋根のもと考えられる礎石が東西に4基並び、そのやや南に北円堂の1952～1955年修理時の足場と考えられる掘立柱穴が認められる。

ii. その他の遺構

近世・近代の土坑群SK10651～10658 Ⅲ区北辺に大小10基の土坑を検出した(第24・28図)。大きなものは、調査区の幅を超え、深さは約2mに達し、小さなものは1m前後、深さ50cm程度で、これらが重複して掘られている。これらには多量の土器と瓦を含まれる。遺物からこれらの土坑のほとんどは近世以降のものと考えられる。特に、土坑SK10651からは、19世紀第3四半期に位置付けられる多数の陶磁器類のほか、瓦、鉄釘などの金属製品、貝殻など食物残滓が出土した。この上面には、大正11年(1922)の銭貨を含む造成土(黒色土)がのる。(芝)